

高 齢 者 の 自 己 概 念

—老人用 SCT を用いた半構造化面接を通して—

西郷 恭嘉

自己概念とは、自分自身について持つ意識的認知像であり、その善悪は個人の行動とりわけ適応を規定する主要な要因であるとされている。現在、高齢者の自己概念についての研究は十分であるとはいえない。よって、本研究では高齢者の自己概念の諸特性を的確に捉えることを目指した。そのために、老人用SCTの一部を用いて、19名に個別で半構造化面接を実施し、老人用SCTのカテゴリーごと、質問項目ごとの諸特性、また属性ごと(年齢・性別・家族構成・配偶者有無)に分類しての諸特性を捉えた。

その結果、全体的に肯定的認知を示していたのは、自己の現在イメージ、友人イメージ、身体イメージ、加齢イメージ、生イメージ、価値観であった。また、属性別で見た場合、特に家族構成別で肯定的・否定的という違いが多く見られた(家庭イメージ、家庭での自己認知イメージ、死イメージ)。また、反応する人数が少なかったり、反応しても多くを語らなかった質問項目(自己の美点、弱点、他者からの認知イメージ、死イメージ)についても、そのような結果になったこと自体が高齢者の特性を捉える上で意味のあるものとなった。

T A T 物語の現在部分に表出された否定的感情から

個性的特徴の反映を見極める基準の模索

染谷 かなえ

TAT図版の絵は、どれも被験者に否定的感情を喚起させるような情景である。そのため、現在部分では否定的感情が多く語られるが、その感情には、被験者の個性的特徴をも反映しているのではないかと考えた。本研究では、否定的感情の表出特徴(表出した感情、その感情への対処、その物語の結末)と物語の全体構造とを、複数被験者間で比較することにより、物語に表れた否定的感情のこういった側面及び構造的布置が、被験者のどのような個性的特徴の反映であるかを見極めるための基準を模索することを目的とした。短大生から大学院生までの男女、20名ずつを対象に、ハーバード版TATを個別法で実施。各被験者ごと・各図版ごとに、否定的感情の「表出特徴」と、「人格所見(物語の全体構造)」とを関連させ、個々の否定的感情のもつ解釈上の意味付与を考察した。多くの否定的感情の中でも、対自感情に注目し、複数被験者間で比較した。その結果、標準的な対自感情にも、その被験者の個性的特徴が反映していることがあった。本研究から、個性的特徴の反映と見極めるには、多義性の高い図版での反応特徴、時間的継起の長さ、問題解決の特徴、他図版での特異な認知特徴に注目することが重要であることがわかった。